

東流二絃琴に関する資料目録(昭和前期篇)

重松 恵美

一 はじめに

前稿および前々稿⁽¹⁾では、東流二絃琴^{あずまのうにんぎん}に関する明治期から昭和三年(一九二八)までの文献について考察した。本稿はその続編であり、昭和前期篇として昭和十七年(一九四二)までの資料を収録した。

今回の資料の大半は、東流のラジオ出演に関するものである。町田嘉章(佳聲)がレコード解説⁽²⁾に書き残していた通り、ラジオ出演の記録をたどると蘆水派と蘆江派の対立の様子は明らかである。また、今回の調査で新たに判明したことも幾つかある。蘆江が四代家元藤舎蘆船を名乗る前に二代蘆瑟を名乗っていること。蘆江の家元襲名に対抗して蘆水は「蘆水派の家元」と呼ばれ、後に蘆翁を名乗り、蘆水の名を弟子に継がせていること、などである。

このような女性奏者たちの活躍は、新聞紙上に常に話題を提供した。彼女たちは素人奏者であるにも関わらず、あるいは素人であるからこ

その話題性を持つて、顔写真や芸歴、本名が紙上に掲載されることとなった。そして、東流の女師匠には、経済的に余裕のある家庭の婦人というイメージが付きまとい、弟子を取っていてもそれは生活のためではないとされた。専業の師匠や職業演奏家を持たない(とされる)東流は、その楽派を継承し存続させる上で大きな困難を抱えていたと言える。

ラジオ出演は新たな弟子の獲得に効果があったと思われるが、戦時体制が強化されるにつれ新聞紙上のラジオ欄や演芸欄は縮小され、二絃琴に関する記事も紙上から姿を消してしまふ。それでも東流のラジオ出演が継続されたのは、東流二絃琴というものが復古精神や愛国精神と齟齬をきたさない、時局に害のないものと考えられたからなのだろう。

幕末に「土佐藩士を中心に多くの愛好家が輩出した」⁽³⁾と伝えられる一絃琴、「中山琴主が出雲大社などに献奏する音楽の楽器として創案」⁽⁴⁾したと伝わる八雲琴、それらとは思想的に隔絶した俗な楽器とし

て東流は位置づけられてきた。だが実際のところ東流において一絃琴や八雲琴の思想的影響は多大であつて、東流の独自性を明らかにするために東流が先行楽派から受け継いだものをも検討せねばならないだろう。八雲琴と東流との継続性については、中条信礼(国学者)、本多利實(二代藤舎蘆船)、大岸元琴(八雲大岸流家元)らとの関わりを読み解くことで、新たな見解が得られるのではないか。

本稿では、まず、昭和前半期の文字資料および音声資料を紹介する。ラジオ出演に関する記事など、新聞各紙に見られる情報は、別立てとする。八雲琴と東流の関わりについては、幕末から明治初期の出来事であり、本稿末尾に付記として掲載するものとする。

二 資料目録(昭和四年以降の文献)

一九二九年(昭和四)十二月

ラヂオ協会、日本ラヂオ総覧編集部編集兼発行『日本ラヂオ総覧 後巻』三頁

『概要』演奏者・音楽家の人物情報の中に「二絃琴、東流『藤舎蘆水』森こう」を収録。「略」蓋し二絃琴界にとつては、先輩蘆瑟、蘆洲の両師は既に老境に入つて、又街頭に叫びかけるの元気なく、斯界復活の重大な責務は独り女史の双肩に負はされてゐる。そして女史の出現は斯界人のエンヂエルとして脅威の眼を以て迎えられ、明日の二絃琴界にとつては大いに期待をつなぐものである。」

〔注〕『現代音楽大観』(一九二七)の人物情報とはほぼ同内容。

一九三〇年(昭和五)九月

長谷川時雨「神田附木店——日本橋」『女人芸術』第三卷九月号

『概要』長谷川時雨の幼少期の見聞を中心に、日本橋近辺に暮らす人々を描いた連載随筆。「神田附木店」の回(連載第一七回)は、時雨九歳の夏の出来事から始まる。

「あんぼんたん」こと「あたし」(のちの時雨)は、八月の暑い午後、「古帳面屋のおきんちゃんに連れられて、附木店のおきんちゃんのお母さんの家へ」行つた。おきんちゃんは「十歳で、小柄で、ませてゐる、清元の巧者な町の小娘」で、その叔母さんは「その時分、好事家の間から、漸く一般的に流行しかけて来た、東流二絃琴のお師匠さん」だつた。

「その後十年もの間にぼんやりと知つたものだが——東流二絃琴は明治十七年ころ世に流行しはじめた。家元の藤舎芦船といつた加藤某は、世をすねて風流文雅に反れた士である。高弟藤舎芦雪、またなみなみの材ではなかつた。この後継者が早折しなかつたら、東流二絃琴はもつとひろまつたであらうと惜まれてゐた。／芦船、芦雪は歌曲ともに創作する力もち九十五曲を作りひろめた。この二絃琴の特長は粹上品なのである。荻江節も一中も河東も、詩吟も琴うたも投節も、あらゆるもののよき節を巧みにとり入れて、しかも楽器相当に短章につくつたところに妙味があつた。」(略)

「九代目市川團十郎が「忠臣蔵」の大星内蔵之助で山科の別れに「冬の恵」を奏で、また四国旅行の旅土産に「三津の眺め」の唱歌をつくたので一層評判になつた。(略)今でも片岡仁左衛門が大石をすると二

絃琴を弾くが調子がととのはないので耳につく。團十郎もしきりに調子を直し直し、芝居が楽になつたさうでさる。」(略)

「あんぼんたんが二絃琴のおしよさんの家についた時分には、もう家元芦船も芦雪も歿なつてゐた。直門に、芦質、芦洲、芦總、芦壽賀等が残つてゐた。きんぼうのおばさんがその藤舎芦壽賀なのである。」

「芦質さんといふ女が一番名望家らしかつた。(略)斯波さんの御新造といつて、浅草蔵前の方に居たから、もしかすると民政党の斯波氏のおうちの方だつたかもしれない。この女が家元の格をもつてゐたやうだつた。」

「日本橋伊勢町の方に芦洲さんは住んでゐた。(略)いま、東流二絃琴の正統な弾手として奮闘してゐるのは、この人のお弟子さんたちちがひない、ごく若い娘さんたちで名とりになつてゐた人のあつたことを思ひだす。この派の弾き手なら、直門の正しい手法といへるだらう。」

(略)

「私の家にも芦船氏が来たのださうだが、(略)父が時たまとりだして、安座をかいて、奏管で(琴爪)琴につけた譜面の星をウロウロ探しあてて弾いてゐた。大かた九世團十郎時代のお弟子の一員でもあつたのであらう。父はその琴を撫ていつた。／「これは芦船の形見だよ。」

《注》「長編随筆 日本橋」は一九二九年四月から一九三二年五月まで連載され、一九三五年に『旧聞日本橋』(岡倉書房)として刊行された。

「芦質」とあるのは、蘆瑟改め三代蘆船(本名、斯波まさ)。日本橋伊勢町の「芦洲」とは、蘆洲(本名、大澤やす)のことか、ある

いは蘆水(本名、森こう)の師匠として知られる蘆柳と混同したのであらうか。『現代音楽大観』(一九二七)によると、蘆洲の現住所は小石川区で明治期の住所については言及がない。一方、蘆柳はかつて日本橋伊勢町に住んでいたとある。長谷川時雨が「いま、東流二絃琴の正統な弾き手として奮闘してゐる」と述べたのがラジオで活躍していた蘆水派のことであれば、これは蘆柳の弟子と孫弟子たちである。前年末に蘆洲が蘆水を「家元直門でない」と新聞紙上で批判したことと合わせ見ると興味深い問題である(蘆洲の発言については本目録の後段にて紹介する)。

同年十月

長谷川時雨「明治座今昔——日本橋18」『女人芸術』第三卷十月号

《概要》本文冒頭に小見出しとして「神田附木店(ツギキ)」とある。

二絃琴に関する箇所は、以下の通り。

「芦壽賀さんは、向ふ両国の青柳といつた有名な料亭の女将でもあつた。百本杭の角で、駒止橋の前にあつて、後には二洲楼とよばれ、さびれてしまつたが、その当時は格式も高く、柳橋の亀清よりきこえてゐたのだ。(略)だからおしよさんが、お嬢さんあいての月謝をすこしばかり集めて、二絃琴なんぞ教へてゐるといふことは、めんどくさかつたらうと思ふ。慰さみ半分の閑を消すためだつたかもしれない。」

(略)

「おしよさんの家へは、綺麗な娘さんたちが多く来た。みんな美しい人だつた。お母さんやばあさんの自慢の娘さんたちだつた。鴛鴦に

鹿の子をかけたたり、ゆひわた島田にいつたり、高嶋田だつたり、赤い襟に、着ものには黒縹子をかけ、どんなよい着物でも、町家だから前かけをかけてゐるのが多かつた。前垂れの友禪ちりめんが、着物より派手な柄だから揃つてゐると綺麗だつた。春の夕暮など、鬼ごつこや目かくしをすると、せまい新道に花がこぼれたやうに冴々した色彩が流れた。」

《注》お師匠さん(芦壽賀)が若いころ両国に「並び茶屋を出し」ていたこと、芦壽賀の姉が「吉原で清元で売つた芸者」であり、末の妹が「踊りの師匠」であつたことなどが、「神田附木店」の章に記されており、本章冒頭の「有名な料亭の女将」は、それに付随する情報である。「明治座今昔」の章には芦壽賀を芦須賀と表記した箇所もある。

一九三四年(昭和九)六月

田邊尚雄「二絃琴」(藤村作編『日本文学大辞典』第三卷、新潮社)一七〇—一七一頁

《概要》「二絃琴」の「異称」を「八雲琴」とし、その「沿革」の後半部に以下の記述がある。「大岸正常は号を元琴といひ、江戸に出て下谷根岸にあつた。その時江戸の旗本の次男に加藤亀太郎といふ者があり、幼より音曲を好み、長唄の囃子に達してゐたが、大岸元琴の門に入つて八雲琴を学び、八雲琴の古風なるに慚らず思ひ、俗曲・端唄等の俗耳に入り易いものを主として奏したので、師から破門された。そこで彼は自ら藤舎蘆船と名乗り(藤舎とは、彼の定紋が下り藤であるのによる)、

八雲琴の名を改めて、東流二絃琴と称して世に弘めた。関東に於ては、遂に八雲琴を圧倒して独り栄えるに至つた。初代蘆船の一子加藤常理は、愚にして遂に家産を蕩尽したが、常理の妻はまの兄本多利實なる者が、その跡を襲いで二代目蘆船と称し、一時は相当の勢力もあつたが、明治の末年から急に衰へて、今日では門弟等が辛うじてその跡を維持してゐる有様である。」

《注》八雲琴と東流の關係については、こうした挿話がしばしば伝説的に語られてきた。神前楽器としての八雲琴の側から、東流は正統でないと言われ、東流のみならず大岸流の八雲琴からして正統でないという説もある。この問題については後述する。

一九四一年(昭和十六)十一月—一九四二年一月

長谷川時雨「渡りきらぬ橋」『新女苑』

《概要》長谷川時雨の自叙伝小説とされる作品で、没後発表された。二絃琴に関する記述は以下の通り。「折もをり、幼少から可愛がつて、自慢の弟子にしてくれてゐた長唄六三郎派の老女師匠から、義理で盲目の女師匠に替へられたりして、面白味をなくしてゐたせゐか、九歳の時から始めてゐた、二絃琴の師匠の方へばかりゆくのが、とかく小言をいはれるたねになつてゐたところ、この二絃琴のお師匠さんがまた、褒めるつもりで、宅へお出でなすつてゐても、いつも本箱の蟲のやうに、草双紙ばかり見とお出でなのに、何時耳に入れてゐるか、他人のお稽古で覚えてしまつて、世話のないお子ですと、お世辭をいつたのだつた。」

《注》のち、戦後版『旧聞日本橋』（青蛙房、一九七一年）に収録された。引用は、『長谷川時雨全集』第五卷（日本文林社、一九四二年）の復刻版（不二出版、一九九三年）による。

一九四二年（昭和十七）十月

長田幹彦作詞、清元梅次作曲「舞踊組曲…梅の宵月」コロムビア

《概要》演奏は、豆千代（歌）、清元梅次（三味線）、清元梅貞次（三味線）、藤舎蘆月（二絃琴）。収録時間三分三〇秒。

《注》豆千代は、一九三四年五月二十九日の新聞各紙に豆千代初放送（ラジオデビュー）の記事があり、以後、流行歌手として活躍した。現在、国立国会図書館デジタルコレクション（国立国会図書館および歴史的音源配信参加館内公開）に収録されている。

同年十一月

寺島榎史「原敬と芦翠女」（寺島榎史『寺島榎史選集…冒険、実話、小説』）

文松堂二六二―二九九頁

《概要》原敬の若き日の恋人であった芸者およし（芳松）が、のちに「吾妻二絃琴」の師匠（藤の舎声翠）となつて鹿鳴館で原と再会するという小説。全八章の章題は次の通り。一章「手紙の謎」、二章「上等車の客」、三章「胸騒ぎ」、四章「義理と恋」、五章「月に訴へる」、六章「吾妻二絃琴」、七章「あきらめ」、八章「佳人の不遇」。

第一章は原からおよしへの手紙で始まる。二年前に海外渡航した原だが、今は帰国して大阪にいますという。およしは吉原京町中米樓の内

芸者。原のことが忘れられず、早速大阪へ向かう。二章から五章は大坂にて展開される。天津領事となるために恩人（中井弘）の娘と結婚するという原。およしは出世のために恋を捨てる男の不実をなじり、当地を去る。六、七章はその四年後、鹿鳴館で開催された男女交際会。およしは出演者の一人「藤の舎声翠」として原の前に現われ、「吾妻二絃琴」を独奏する。そしておよしは「廓内の芸者衆や娼妓に、生花、茶の湯」を教え、「吾妻二絃琴の師匠」として「内弟子も多く何不由なく暮して」といると原に語る。八章は更に「かなりの年月」の後。原の妻が離縁され泣き暮らしていると知ったおよしは、「佗住居を、時折りは訪ねて、不遇の佳人を慰め」という。

《注》この小説には典拠となる新聞記事がある。一九〇七年五月十九日、原敬の若き日の恋人およしのインタビューが新聞各紙に載り、そこには証拠として原直筆の手紙の一部も掲載された。およしの本名、経歴などは、ほぼそのまま小説に用いられている。

『萬朝報』『都新聞』『東京日の出新聞』などに大同小異の記事が載り、一九三四年刊行の『新聞集成明治編年史 第一三卷』にも『報知新聞』の記事が収録されているため、それらを寺島は参考にしたのではないか。⁽⁷⁾「原敬と芦翠女」の初出は未詳だが、寺島は総合雑誌や実録小説誌に実在の人物をモデルとした小説を発表しており、そうした作品系列にあるものとして本作を考えることができる。

三 資料目録(新聞ラジオ欄)

ここでは、新聞のラジオ番組表、および、ラジオ番組の紹介記事を対象とする。特に記述のないものは、東京局(JOAK)による放送である。一九二八年十一月と翌年二月の出演時は全国中継放送と明記されているが、その後は東京からの中継を利用するか否か、各局の判断に任されたようである。例えば、一九二九年五月の放送では札幌、仙台、名古屋、広島、熊本にて東京局の二絃琴番組を中継し、大阪は独自番組として長唄を放送している。

新聞に関しては、本稿収録分は放送当日の東京版の朝刊であり、新聞掲載日は放送日と同日である。放送時間については、夜の出演が減り、お昼の演奏枠で放送されることが次第に定着する。午後零時〇五分から四〇分まで(後に零時三〇分まで)が昼の演奏枠であり、その時間枠丸ごと二絃琴の場合もあれば、他の演奏と時間枠を二分した場合もある。

ラジオ出演の記録は表の形で整理したが、その前に、東流に関する長文の新聞記事を記載する。前稿の収録範囲であった一九二七年から翌年の記事についても、追加判明分の重要なものをここに記す。

*

一九二七年(昭和二)二月十六日(水) 『読売新聞』朝刊、九頁
「この頃ソロソロ知られて来た／二絃琴大もて／今ばん美人揃ひで放送／三十年前には大はやりの日本音楽」「隠れたる二絃琴愛好家／家

中が喜んで聴く／ゆかしい趣味の家庭音楽／手芸の先生 奥村華子さんの話」「美人揃ひの囃子方／二絃琴には付き物の囃子に」

《概要》鳴物出演の望月太伊、望月せい子を大きめの写真で紹介。蘆瑟、蘆江、蘆水の写真も掲載するが、キャプションに混乱がある。

「二絃琴ファン：奥村華子さん」の写真とインタビューも掲載。

同年十一月十日(木) 『読売新聞』朝刊、九頁

「東流二絃琴／午後八時ごろ／藤舎蘆水社中」

《概要》ラジオ出演の追加判明分。「布袋」と「東の栄」の歌詞を掲載。

出演者は、唄：蘆水、二絃琴：蘆江、蘆侘、鳴物：望月長子、堅田喜千治、望月太賀、望月せい子。

一九二八年(昭和三)一月十四日(土) 『読売新聞』朝刊、九頁

「東流二絃琴／午後八時半」

《概要》ラジオ出演の追加判明分。「七草」と「石橋」の歌詞を掲載。

出演者は、唄：蘆水、二絃琴：蘆江、蘆侘、蘆天津、鳴物：長子、初子、太賀、せい子。

同年四月二十日(金) 『読売新聞』朝刊、九頁

「陽気な酒の席で弾くと／怒鳴られた二絃琴／前身は武士が使った須磨琴／新手を編出した藤舎蘆船さん」「長唄と同じお囃子／三味線と二絃琴が代るだけ」「時節向きの出し物／放送はお馴染の蘆水さん一門」

《概要》蘆江と蘆水の写真が載るがキャプションに混乱あり。見出しに「新手を編出した藤舎蘆船」とあるのは初代蘆船のこと。「三味線と二絃琴が代るだけ」というのは、長唄では三味線とお囃子を合わせるが、それを二絃琴とお囃子の組み合わせに代えたということで、「望月扑清氏が考案し改革した」と説明されている。記事冒頭には、「AK名物の一つ毎月お定まりの二絃琴」とあり、月一回の放送を基本としていたこと、東流二絃琴は東流の名の通り東京発祥の芸能であるから、これを東京局(AK)の「名物」と考えていたことが分かる。

同年五月十三日(日)『読売新聞』朝刊、一〇頁

「東流二絃琴 午後八時ごろ」

《概要》ラジオ出演の追加判明分。「新曲 煩惱」と「由縁の月」の歌詞を掲載。出演者は、唄・蘆水、蘆天津、二絃琴・蘆江、蘆倍。

同年九月二十四日(月)『読売新聞』朝刊、三頁

「團十郎の芝居に弾かれた／名下方師蘆船の二絃琴／八雲の調子に粹な所を加へて創案す／最初の製作者荒井翁の二絃琴物語」「日清役後に盛んになり／上流家庭に流行した二絃琴」

《概要》「お座敷に湧く夢の音は：／ゆかしき二絃琴の調べ：」として、琴を弾く蘆天津と隣で唄を歌う蘆水を写した大きめの写真が掲載されている。荒井翁とは「八雲を二絃琴に改良した荒井兵二郎」のこと、「七十四の今日未だ健か」で、「今も芝琴平町で二絃琴の製造元をしるてゐる」という。荒井の談話は以下の通り。

「八雲から二絃琴が別れたのは明治三年頃で、それにはこんな原因があります。元来八雲は神前などで儀式用として極静かに奏されたりしてゐたのですが、当時の名人藤舎蘆船が、一風変わった人で、その調子に一寸粋な所を加へ初めたものだから、自然仲間から苦情が出るやうになり、独立して二絃琴を創案したのです。(略)歌は大体明治初年頃中條某と云ふ旗本が作ったもので、その以後の作を大体新曲と云つてゐます。」

「九代目團十郎が非常に好み、又蘆船を愛し下方師は蘆船でなくちやと云つて、他のものを許さなかつた程ださうです。(略)」

「二絃琴が非常に全盛を極めたのは日清戦争後から明治四十年頃迄で何うして日清役後盛になつたかと云ふとそれまで全盛を極めてゐた月琴が支那楽器と云ふ所から反感を買ひ上下こぞつて二絃に移つたものださうです。当時如何に隆盛だつたかは、荒井さんの店で毎月四五十年平均してはけたことで物語つてゐます。四十年後はだんだん下火になり震災を転期に今日ではバツタリ衰へてしまひました。然し震災前は山科禮藏さんの奥さんや松平義爲伯のお母さんなどが熱心に稽古したものです。今日はラヂオの放送から又ポツポツ熱が吹き返されて來てゐる」

《注》荒井兵二郎製造の二絃琴は今も各地に現存する。琴本体の裏面に焼印があり、「藤舎好」「東京芝区」「荒井兵二郎」などの文字を読み取ることができる。「歌は大体明治初年頃中條何某と云ふ旗本が作った」というのは、恐らく中條信礼(豊蘆館)のこと。

一九二九年(昭和四)十二月七日(土)『読売新聞』朝刊、九頁

「通を語る 二絃琴の巻」「七十の老嫗が／＼二絃琴の復興を語る／＼青山博士夫人も熱心に稽古」

《概要》「気焔をあげる老師匠：藤舎芦洲」の顔写真を添え、蘆洲の談話を掲載。

「大澤よ□子さんは二絃琴の創始者藤舎芦船の直門で生残つてゐる只二人の中の一人で、その名を藤舎芦洲と言ひます。七十四歳の春を迎へようといふ老齡ですが、義齒一つないのを自慢に小石川仲町一四の自宅で二絃琴と長唄を教授しながら暢気に独居を楽んでゐます。往時の二絃琴を語つたり現在の二絃琴を説いて気焔をあげる。」

「『もう少し早く御出でになると恰度よろしう御座いましたのにネ、午前中ですと青山博士(医博)の奥様がいらしたのですが、ほんとに残念なことを致しました。奥様は貴方二絃琴には大変深いよしみが御座いますのです、家元さんが二絃琴をお考へになつたのは、青山さんの奥様の御実家に(小林さんと申しまして位階もお持ちになつて居りました方です)御厄介になつてゐらつしやる頃なのでした。そんな関係で二絃琴の最初のお弟子は奥様の御尊父なのですもの——私共が家元へ稽古にあがります時分、奥様はまだ可愛いお嬢様でお稽古にいらしてました位で御座います。こんなことを申上げてはお悪いかも知れませんが、奥様は蘆林あしりんと言ふ名もお持ちなのです。あ、けふ放送する芦水さんですか、あの方はいつぞや私共へお出でになりました順廻(月凌)ひで順に各師匠の家を廻るのでこの名がある)のお話が御座いまして、二三次おつき合ひも致しましたが、さう申しては何ですが、家元直門

でないだけに何うも私共とは合はないところもありますので今ではお交際して居りません。伺つて見ますと芦瑟さんなども最初は一緒に放送なども致しましたが、あの方の唄ひ方によくない所があるので、御注意したりしてすつかり嫌はれたとかでこの頃は一緒にならないやうです。エー芦瑟さんは私の先輩で御座います。芦水さんは私共と同門の芦柳さんのお弟子だと申して居りましたから、家元からは孫弟子に当る訳です、夫まごにあの方は端唄はなうたの師匠をして居たとかで、声は大変よろしいのですが高尚な二絃琴の唱歌には何うかと元二絃琴をおやりになつた奥様方は申しておいで、す、私共の伺つた奥様方ですか、何うも困りますネ今のことぢやないんです、ずつと以前お稽古した方々では松本君平さん、渡邊渡さん、加茂博士、神保小虎さん、大塚博士などの奥様方で御座います。若いお嬢様や殿方が遊ばすにはよろしいものなのですが、すつかり長唄に押されて仕舞ひまして、何方でも困つておみでのやうで御座います、貴方一つお始めになりませんかホ、ホ、」

《注》『読売新聞』では、この頃、愛読者による投票企画「七種芸と新人放送者の推挙」が実施され、ラジオの演芸番組の出演者たちの得票数が毎日のように紙上発表されていた。二絃琴についてはまず蘆水の得票のみ報じられ、数日後に蘆瑟と蘆水の名が並び、「忽然と出現した二絃琴の藤舎蘆瑟さんが久しく独壇場を誇つてゐた藤舎蘆水さんを一撃に倒して第六位に入選した」と報じられた。⁸⁾ こうした報道が蘆江派(蘆瑟派)と蘆水派の対立をとおおり、蘆洲の「気焔」を引き出した可能性がある。

一九三〇年(昭和五)八月十一日(月)『読売新聞』朝刊、四頁

「二絃琴の新顔唄ひ手／蘆水師の娘で／けふ初放送」

《概要》蘆水の娘、森藤子の半身写真を掲載。

「藤舎芦水一門の二絃琴の唄は、いつも芦水自ら承はるところだが、けふは珍しく最初の『菊の寿』の唄は森藤子さんが唄ひます。藤子さんは芦水の愛娘で今年十五、まだ女学校へ通学中の娘さんだが、流石は母の血をうけたゞけあつて、声が要るので一寸唄ひ手が無いと言はれる二絃琴の唄を、やつて退けようといふ咽喉の持主である。それに母の愛とやらでお囃子が入つて唄が消されるやうでは折角初放送が台無しになると案じて、囃子無しの方だけ唄はせて、囃子に入る『四季の詠』の方は自ら唄ふ。母の許で二絃琴を習つてゐる藤子さんは『二絃琴の唄より学校で教はるソプラノの方が何んなに楽だか知れやしないうワ』と二絃琴の唄がむずかしいことを□ぶやいてゐるさうです。」

《注》森藤子の写真は三つ編みのお下げ髪で、いかにも女学生という風情。次回出演時には藤子でなく富士子と記載されている。

同年十一月十三日(木)『読売新聞』朝刊、九頁

「腕比への二絃琴／けふは家元派が／お囃子入りで演奏」

《概要》「家元派の二絃琴」として、蘆葉、蘆翠、蘆汀の顔写真を掲載。

「二絃琴と言へば藤舎芦水とその一門に限られてゐたやうだったが、藤舎芦瑟が三代目芦船を襲名して以来、所謂家元派が芦水派と交互出演するやうになつたので、自然両派の腕比べと言ふことになり、どちらも一生懸命に熱演するので、ともしれば沈滞しようとする二絃琴界、

一道の生気を吹き込んだのは飛んだ拾ひものである、けふの二絃琴は家元派で、芦船の影武者として活躍してゐる芦江を総帥に「常盤」と「岩戸の舞」をお囃子入りで賑かに演奏する」

《注》「常盤」「岩戸の舞」ともに三代目蘆船作曲と記されている。

「岩戸の舞」は初代蘆船編の唱歌集収録曲であるが、歌詞のみ伝えられ節(曲)が失われたものを三代蘆船が復元したと思われる。三代蘆船の実力と蘆江派の正統性をアピールする選曲であらう。

一九三二年(昭和七)三月十八日(金)『読売新聞』朝刊、一〇頁

「上海出征部隊の凱旋をいはふ曲／胡弓入りの新二絃琴」

《概要》「時代に遅れてはと古典二絃琴が胡弓を入れその初お目見えをする、そして新曲「かちいくさ」は一昨年(略)「桃太郎」と題して新作したものを持恰も上海出征部隊の凱旋にあたるので時節向きに「かちいくさ」と題したのである。(略)」

一九三三年(昭和八)四月十四日(金)『読売新聞』夕刊、三頁

「映画と演芸——豆鉛筆」

《概要》「二絃琴の家元三代目藤舎蘆舟さんは昨秋没し、家元の名はその儘になつてゐたが、今度藤舎蘆江さんがついだ。澤村國太郎の叔母さん。⁽¹⁰⁾」

同年五月六日(土)『読売新聞』朝刊、一〇頁

「新家元のご披露／蘆瑟四代目蘆船を襲名／自作の『庵の春』を初

演」

《概要》「新家元四代目藤舎蘆船さん」の写真を掲載。

「けふの二絃琴は藤舎蘆瑟(六〇)が二絃琴の家元になつて四代目蘆船を襲名したお披露目放送である、新家元は先代蘆船の直門で昨春先代が物故したので蘆瑟が襲名する事となり一昨四日上野の梅川で襲名披露をした、出演者の顔ぶれは初代家元の高弟蘆柳の直門の蘆福(七七)さんを年寄の筆頭としたお婆さん連で蘆船門下の蘆汀(四八)蘆勢(六三)に新顔の蘆浪(〇〇)を加へての放送である」

《注》「庵の春」には「初代蘆船作詞四代蘆船作曲」とある。初代蘆船編の唱歌集に収録された曲であるが、歌詞のみ伝えられ節(曲)が失われていたものを四代蘆船が復元したものと思われる。

一九三七年(昭和十二)八月九日(月)『読売新聞』朝刊、一〇頁

「二絃琴／蘆翁襲名のお披露目放送」

《概要》蘆翁(唄)と二代蘆水(琴)の写真を掲載。

「二絃琴弟子はどうでもいゝ、師匠」と川柳に詠まれた如く二絃琴は粹人の余技に奏でられお師匠さんの看板は出してもお弟子をとつて暮しを立てると云ふのでなかつたので社会の波から取のけられ衰退する一方であつたところラヂオの普及と共に唄の家元蘆水、琴の家元藤舎蘆船さんの努力で渋い二絃琴が復興して来たのに勢を得て蘆水さんは蘆翁の名を創り初代蘆翁を名乗り、蘆水の名を一番弟子の蘆天津(本名村田てつ)さんに譲り二代目を襲名させた、けふは襲名後最初のお披露目放送に蘆翁さんが襲名披露に作曲した「翁」を演奏する予定だつ

たが、時間の都合上以前作つた新曲「夏の夕」を放送する、出演者の中蘆船さんは蘆翁さんの妹弟子、蘆喜美さんは蘆船さんのお弟子、鳴物の望月初子、せい子さん姉妹は望月扑清さんの娘さん、望月長美津、太伊さんは扑清さんのお弟子である」

一九三九年(昭和十四)十一月六日(月)『読売新聞』朝刊、一〇頁

「枕草子を唄ふ二絃琴」

《概要》「略」「常盤」は明治四十三年家元が蘆江時代に師匠三代目と合作した曲に町田新日本音楽の町田嘉章さんが二絃琴の高音を浮立たせる為に三味線を加へて演奏する「風は」は町田嘉章さんが昭和八年「国文学歌歌曲三曲」として作つたうち清少納言の「枕草子」の原文に作曲したものに隆笛を入れて演奏する、一曲ともラヂオ初演である」

《注》隆笛は邦楽にも洋楽にも使える楽器として町田が開発したものである。一九三二年八月二十六日『読売新聞』朝刊一〇頁に以下の記述がある。「AKの和楽囀託町田嘉章氏がエポナイトで六孔ある篠笛を發明し雅楽の龍笛に因んで隆笛と命名し今春二月その発表演奏会を催しセッションを起こした」

【表】新聞ラジオ欄に基づく東流二絃琴出演記録

			1930 (昭和5)				1929 (昭和4)	年
6/16 (月)	5/12 (月)	3/14 (金)	2/15 (土)	12/7 (土)	11/5 (火)	5/29 (水)	2/20 (水)	年月日
『読売新聞』朝刊四頁 「爽やかに涼味を唄ふ／ お昼の二絃琴」	『読売新聞』朝刊四頁 「お昼の二絃琴／新緑の 唄を唄ふ二絃琴」	『読売新聞』朝刊九頁 「二絃琴 石橋」	『読売新聞』朝刊九頁 「東流二絃琴／新曲 桃 太郎」	『読売新聞』朝刊九頁 「東流二絃琴」	『読売新聞』朝刊九頁 「東流二絃琴」	『読売新聞』朝刊九頁 「東流二絃琴」	『読売新聞』朝刊一〇頁 「お昼休みのお楽しみ／ 東流二絃琴」	主な掲載紙、 曲紹介記事見出し
午後零時五分～零時 四〇分	午後零時五分～零時 四〇分	午後零時五分～零時 四〇分	午後八時三〇分～九 時	午後零時五分～零時 四〇分	午後八時三〇分～九 時	午後八時三〇分～九 時五分	午後零時五分～零時 三〇分	放送時間
一「浅草八景」 二「新曲 夕涼」作詞蘆天 津、作曲蘆水 いずれも歌詞有	一「郭公」 二「船遊び」 いずれも歌詞有	一「石橋」歌詞有	一「新曲 桃太郎」作詞蘆 天津、作曲蘆水 歌詞有	一「浅妻」 二「四季今様」 いずれも歌詞有	一「浮寝の夢」 いずれも歌詞有	一「常盤」 二「三津の綾」 いずれも歌詞有	一「関寺小町」歌詞有 二「新曲 春遊び」作詞蘆 天津、作曲蘆水 歌詞有	曲目 (歌詞掲載の有無)
唄 蘆水 琴 蘆倍、蘆雀、蘆三津 笛 長子、小鼓 初子 大鼓 太伊、太鼓 せい子	唄 蘆秀 琴 蘆江、蘆鶉、蘆汀 笛 長子、小鼓 初子 大鼓 太伊、太鼓 せい子	唄 蘆水 琴 蘆倍、蘆天津、蘆雀 笛 望月長子、小鼓 望月初子 大鼓 望月太伊、太鼓 望月せい子	唄 蘆水 琴 蘆倍、蘆天津、蘆三津	唄 蘆水 琴 蘆倍、蘆天津、蘆雀	唄 蘆水 琴 蘆倍、蘆天津、蘆雀	唄 蘆水 琴 蘆江、蘆倍、蘆天津	唄 蘆水 琴 蘆江、蘆天津、蘆雀	出演者(藤舎姓、望月姓は略) (二絃琴は琴と記す)
八名の集合写真を掲載	蘆秀、蘆江、蘆鶉の写真掲載 「二絃琴は若水とその一党に 限るのかと思つてゐたら左様 でもないことがけふ判つた」		作詞作曲者情報は一九三二年 三月十八日の記事による。	同日同頁に「通を語る 二絃 琴の巻」の記事	蘆水、蘆江、蘆天津、蘆雀の 四人並んだ写真を掲載		全国中継放送(京城含む)	備 考

	1931 (昭和6)				
4/10 (金)	1/28 (水)	12/7 (日)	11/13 (木)	9/13 (土)	8/11 (月)
『読売新聞』朝刊五頁 「二絃琴／藤舎蘆江連中」	『読売新聞』朝刊九頁	『読売新聞』朝刊五頁 「冬から明るい春を／うたふ二絃琴／藤舎蘆水連中」	『読売新聞』朝刊九頁 「お昼の二絃琴／藤舎蘆江連中」	『読売新聞』朝刊九頁 「唄の調べゆかしい／古風な二絃琴」	『読売新聞』朝刊四頁 「早くも季節に魁けて／秋を唄ふ二絃琴」
午後零時五分～零時 四〇分	J〇A K二重放送の部（波長四九〇メートル） 午後六時～六時三〇分	午後一時一〇分～一時四五分	午後零時五分～零時 四〇分	午後八時～八時三〇分	午後零時五分～零時 四〇分
一「浮寝の夢」 二「千鳥」 三「岸の藤波」 いずれも歌詞有	一「初子」 二「達磨」 三「梅がしるべ」 いずれも歌詞有	一「隅田川」 二「松の寿」 いずれも歌詞有	一「常盤」作曲三代蘆船 二「岩戸の舞」作曲三代蘆船 いずれも歌詞有	一「逢身八景」 二「三津の綾」 いずれも歌詞有	一「菊の寿」 二「四季の詠」 いずれも歌詞有
一、唄 蘆雪 二、唄 蘆江、蘆翠、蘆悦、蘆鶉 三、唄 蘆雪 琴 蘆鶉、蘆翠、蘆悦、蘆江	一、唄 森富士子 二、唄 蘆水、蘆悦、蘆智恵 三、唄 蘆水 琴 蘆水、蘆悦、蘆雀、蘆智恵	一、唄 蘆染 二、唄 蘆水 琴 蘆悦、蘆雀、蘆智恵 二、笛 長子、小鼓 初子 大鼓 太伊、太鼓 勢以子	一、唄 蘆勢 二、唄 蘆江、蘆汀、蘆月、蘆翠 三、唄 蘆葉 琴 蘆江、蘆汀、蘆月、蘆翠 一、笛 長子、小鼓 初子、せい子 大鼓 太伊	一と二、唄 蘆秀 二、唄 蘆江、蘆蝶、蘆石 三、唄 長子、小鼓 初子 大鼓 太伊、太鼓 せい子	一、唄 森藤子 二、唄 蘆水 三、唄 蘆悦、蘆雀、蘆三津 琴 蘆悦、蘆雀、蘆三津 二、笛 長子、小鼓 初子 大鼓 太伊、太鼓 せい子
「初放送の藤舎蘆悦」として 顔写真掲載	一〇頁「演芸」面に「J〇A K二重放送」として歌詞掲載	蘆染の顔写真掲載。 「蘆染さんは初放送（略）新しいお弟子ながら、その美声を認められて（略）」	「腕比べの二絃琴／けふは家元派が／お囃子入りで演奏」の記事。写真は「家元派の二絃琴」として蘆葉、蘆翠、蘆汀の顔写真。	蘆蝶と蘆石の写真掲載	「二絃琴の新顔唄ひ手／蘆水師の娘でけふ初放送」の記事。森藤子の半身写真。

		1932 (昭和7)				
5/12 (木)	3/18 (金)	1/7 (木)	11/19 (木)	9/12 (土)	7/5 (日)	
『読売新聞』朝刊一〇頁 「上海出征部隊の凱旋を いはふ曲／胡弓入りの新 二絃琴」	『読売新聞』朝刊一〇頁 「上海出征部隊の凱旋を いはふ曲／胡弓入りの新 二絃琴」	『読売新聞』朝刊一〇頁 「二絃琴／藤舎蘆葉社中」	『読売新聞』朝刊一〇頁 「古典の殻を破って飛躍 ／二絃琴まで新曲を発表」	『読売新聞』朝刊一〇頁 「常盤御前の嘆きを唄ふ ／お昼休みの二絃琴」	『読売新聞』朝刊五頁 「短夜と時鳥を唄ふ／季 節の二絃琴／藤舎蘆水社 中出演」	
午後零時五分～零時 四〇分	午後零時五分～零時 四〇分	午後零時五分～零時 四〇分	午後零時五分～零時 四〇分	午後零時五分～零時 四〇分	午後二時一〇分～二 時四〇分	
一「船遊」 二「小督」 三「四季の艶」 いずれも歌詞有	一「新曲 かちいくさ」 (「桃太郎」を改題) 二「四季の詠」 いずれも歌詞有	一「七草」 二「梅がしるべ」 三「春の調」 いずれも歌詞有	一「新曲 深山の旅」作詞 蘆天津、作曲蘆水 二「松の調」 三「由縁の月」 いずれも歌詞有	一「常盤」 二「浅草八景」 三「松虫」 いずれも歌詞有	一「松の蔭」 二「四季の今様」 三「短夜」 いずれも歌詞有	
唄 蘆雪 琴 蘆瑟、蘆勢、蘆隆、蘆鶉	唄 蘆水 琴 蘆估、蘆天津、蘆喜美 胡弓 梶野縫子	一、唄 蘆葉 琴 蘆瑟、蘆秀、蘆喜久 二、唄 蘆勢 琴 蘆瑟、蘆秀、蘆喜久、蘆葉 三、唄 蘆葉 琴 蘆瑟、蘆勢、蘆喜久 一と三、笛 長子、小鼓 初子 大鼓 太伊、太鼓 せい子	唄 蘆水 琴 蘆估、蘆雀、蘆千恵	一、唄 蘆榮 琴 蘆瑟、蘆勢、蘆鶉 二、唄 蘆秀 琴 蘆鶉、蘆勢、蘆瑟 三、唄 蘆榮 琴 蘆鶉、蘆勢、蘆瑟 一と二、小鼓 初子、せい子 大鼓 太伊、笛 長子	一、唄 蘆水 琴 蘆估、蘆雀、蘆喜美、蘆染 二、唄 蘆染、蘆雀 琴 蘆水、蘆估、蘆風、蘆喜美 三、唄 蘆水 琴 蘆估、蘆雀、蘆染	
「蘆隆は今日初放送」 東京朝日九頁に蘆鶉、蘆雪の 写真掲載。	梶野縫子は大阪の当道音楽会 所属の大当で三絃奏者とし てラジオ出演した経歴がある (一九二七年六月一九日)。	東京朝日九頁に蘆葉、蘆秀の 写真掲載。	東京朝日九頁「藤舎蘆水氏 東流二げん琴蘆水派の家元、 他はその門下」	蘆江改め蘆瑟と思われる。 東京朝日九頁「二げん琴連中 藤舎蘆船派の方達」	東京朝日朝刊一三頁「藤舎蘆 水氏 本名森こう、衰へつつ ある二げん琴の復活に努力し てゐる」	

			1933 (昭和8)			
7/2 (日)	5/6 (土)	4/3 (月)	1/16 (月)	10/18 (火)	9/6 (火)	7/6 (水)
『読売新聞』朝刊一〇頁 「涼を呼ぶ 二絃琴」	『読売新聞』朝刊一〇頁 「新家元の御披露／蘆瑟 四代目蘆船を襲名／自作 の『庵の春』を初演」	『読売新聞』朝刊五頁 「二絃琴」	『読売新聞』朝刊五頁 「春向きの二絃琴」	『読売新聞』朝刊一〇頁 「二絃琴」	『読売新聞』朝刊一〇頁 「二絃琴の味をしみじみ 味はふ／関寺小町」	『読売新聞』朝刊一〇頁 「二絃琴新曲夕涼はけふ 處女発表／お馴染みの蘆 水社中」
午後二時四〇分～三 時一〇分	午後八時三〇分～八 時五〇分	午後零時五〇分～一 時一〇分	午後零時五分～零時 四〇分	午後零時五分～零時 四〇分	午後八時四〇分～九 時	午後零時五分～零時 四〇分
一「新曲 夏の夕」作詞蘆 天津、作曲蘆水 二「関寺小町」 いずれも歌詞有	一「岩戸の舞」 二「庵の春」作詞初代蘆船、 作曲四代蘆船 いずれも歌詞有	一「隅田川」 二「四季の詠」 いずれも歌詞有	一「浅草八景」 二「窓の月」 三「七富の今様」 いずれも歌詞有	一「都の花」 二「常盤」 三「岸の藤波」 いずれも歌詞有	「関寺小町」歌詞有	一「達磨」 二「月の調」 三「新曲 夕涼」作詞蘆天 津、作曲蘆水 いずれも歌詞有
一、唄 蘆三津 琴 蘆水、蘆佶、蘆天津 二、唄 蘆水 琴 蘆佶、蘆天津、蘆三津	一、唄 蘆勢 琴 蘆船、蘆汀、蘆鶉 二、唄 蘆浪 琴 蘆船、蘆勢、蘆汀	一、唄 蘆雀 琴 蘆水、蘆佶、蘆喜美 二、唄 蘆水 琴 蘆佶、蘆雀、蘆喜美	一、二、唄 蘆照 琴 蘆瑟、蘆香、蘆鷗 三、唄 蘆蝶 琴 蘆瑟、蘆香、蘆鷗	唄 蘆水 琴 蘆佶、蘆千恵、蘆三津	唄 蘆勢 琴 蘆瑟、蘆孫、蘆葉、蘆鶉	一、唄 蘆水 琴 蘆佶、蘆天津、蘆雀 二と三、唄 蘆水 琴 蘆佶、蘆雀、蘆天津
「いつも二絃琴ばかりであつ た蘆三津がけふは唄で初お目 見得する」	「新家元四代目藤舎蘆船さ ん」の写真掲載。 東京朝日七頁に蘆船、蘆浪、 蘆汀、蘆鶉の写真掲載(蘆船 写真は先代)。		「蘆瑟さんは蘆船派の筆頭 (略)蘆照さんは初放送」 東京朝日一〇頁に蘆鷗の写真 掲載。		「故藤舎芦船の直門藤舎蘆瑟 とその社中である。芦孫さん は初放送」	「蘆水派の家元藤舎蘆水とそ の社中である」 東京朝日九頁に蘆水の写真掲 載。

東流二絃琴に関する資料目録(昭和前期篇)

		1934 (昭和9)				
5/29 (火)	4/14 (土)	2/23 (金)	12/28 (木)	11/14 (火)	10/7 (土)	8/28 (月)
『読売新聞』朝刊一〇頁 「二本立ての昼の演奏」	『読売新聞』朝刊一〇頁 「端午を祝ふ二絃琴／古 曲を演奏」	『読売新聞』朝刊一〇頁 「読売新聞」朝刊一五頁 「降笛や低音三絃を用ひ 古曲二絃琴の新しい演奏 ／町田嘉章さん一人二役」	『読売新聞』朝刊一〇頁 「二絃琴と声色／お昼の おたのしみ」	『読売新聞』朝刊一〇頁 「俚謡と二絃琴」	『読売新聞』朝刊一〇頁 「お経をうたふ／二絃琴 の珍曲「布袋」	『読売新聞』朝刊一〇頁 「初試みの笛伴奏入で二 絃琴の放送／町田嘉章さ んもお手伝ひ」
午後零時五分～零時 二〇分	午後零時五分～零時 四〇分	午後零時五分～零時 二〇分	午後零時五分～四〇 分の演奏枠にて二絃 琴と声色	午後零時五分～四〇 分の演奏枠にて里謡 と二絃琴	午後八時～八時二〇 分	午後零時五分～零時 四〇分
一「千鳥」 二「新曲 蘆分船」作詞土 岐善麿、作曲町田嘉章 いずれも歌詞有	一「菖蒲」 二「岸の藤波」 三「藤」 いずれも歌詞有	一「花曲」 二「梅がしるべ」 いずれも歌詞有	一「松の寿」歌詞有	一「初秋」 二「松風の曲」 三「窓の月」 いずれも歌詞有	一「四季の今様」 二「布袋」 いずれも歌詞有	一「松虫」 二「夕風の曲」 三「四季の艶」 四「蘆刈」 いずれも歌詞有
一、唄 蘆勢 琴 蘆船、蘆星、蘆豊、蘆翠 三絃 蘆絃、降笛 蘆生 二、唄 蘆勢 琴 蘆船、蘆星、蘆豊、蘆翠 三絃 蘆絃、尺八 関野生山	一、唄 蘆水 琴 蘆天津、蘆雀、蘆佶 二、唄 蘆雀 琴 蘆水、蘆天津、蘆佶 三、唄 蘆水 琴 蘆佶、蘆雀、蘆天津	唄 蘆勢 琴 蘆船、蘆福、蘆秀、蘆星 一、降笛 蘆笛 二、低音三絃 蘆絃	唄 蘆水 琴 蘆佶、蘆喜美、蘆天津	唄 相川雪子 琴 蘆船、蘆葉、蘆汀 低音三絃 蘆絃	一、唄 蘆染 琴 蘆水、蘆鳳、蘆佶、蘆天津 二、唄 蘆水 琴 蘆佶、蘆鳳、蘆染、蘆天津	一と三と四、唄 蘆勢 琴 蘆船、蘆翠、蘆星 二、唄 蘆翠、琴 蘆船、蘆勢 一、降笛 蘆笛 四、三味線 蘆絃
「新曲「蘆分船」は去る四月 日比谷公会堂で催された都山 流尺八大会の時開曲した、家 元蘆船さんの老境を慰める為 めにその名に因んで土岐善麿 さんが作詞し町田嘉章さんが 作曲したもの」		東京朝日一六頁に蘆雀、蘆水、 蘆天津、蘆佶の顔写真掲載。	四名の写真掲載。「松の寿」 は皇太子誕生奉祝の新曲かと 思われる。		「略」蘆鳳さんは初放送」	「略」町田嘉章さんが三味線 と降笛を琴の伴奏に取り入れ、 蘆笛、蘆絃の名で管絃の二役 を演じて大に器用ぶりを発揮 する」

				1935 (昭和10)		
11/4 (月)	9/24 (火)	6/6 (木)	3/6 (水)	1/29 (火)	10/11 (木)	7/9 (月)
『読売新聞』朝刊一〇頁 「お囃子入りの二絃琴」 四代目藤舎蘆船社中が演 奏」	『読売新聞』朝刊一〇頁 (終了時間不明)	『読売新聞』朝刊一五頁 「昔風の鳴物入り／二絃 琴」	『読売新聞』朝刊一〇頁 「二絃琴 新曲と古曲」	『読売新聞』朝刊一〇頁 「二絃琴と尺八／お昼の 演奏」	『読売新聞』朝刊一〇頁 「二絃琴」	『読売新聞』朝刊一〇頁 「蘆水一派の二絃琴」
午後八時～八時二〇 分	午後二時三十分～ (終了時間不明)	午後八時四〇分～八 時五十分	午後零時五分～零時 四〇分	午後零時五分～零時 二〇分	午後零時五分～零時 二〇分	午後零時五分～零時 四〇分
一「蘆刈」 二「三津之綾」 いずれも歌詞有	一「浮寝の夢」歌詞無 二「常盤」歌詞無	一「松虫」 二「船遊」 いずれも歌詞有	一「新曲 胡蝶の舞」作詞 蘆三津、作曲蘆水 二「石橋」 いずれも歌詞有	一「新曲 池邊鶴」作詞中 村葉月、作曲藤舎蘆船、町 田嘉章 二「梅がしるべ」 いずれも歌詞有	一「仁王門」 二「砧」 いずれも歌詞有	一「短夜」 二「四季の詠」 いずれも歌詞有
唄 蘆水 琴 蘆船、蘆月、蘆隆、蘆翠 低音三絃 蘆絃	唄 蘆水 琴 蘆船、蘆喜美、蘆染	唄 蘆勢 琴 蘆船、蘆孫、蘆橋、蘆鷗 笛 望月長美津 小鼓 望月初子、望月太美濱 大鼓 望月太伊、太鼓 望月せい子	一、唄 蘆三津 琴 蘆水、蘆天津、蘆佶 二、唄 蘆水 琴 蘆佶、蘆三津、蘆天津	一、唄 蘆浪 琴 蘆船、蘆月、蘆隆、蘆翠 低音三絃 蘆絃 二、唄 蘆雪 琴 蘆船、蘆月、蘆隆、蘆翠 低音三絃 蘆絃	唄 蘆水 琴 蘆佶、蘆喜美、蘆染	一、唄 蘆千恵 琴 蘆水、蘆天津、蘆佶 二、唄 蘆水 琴 蘆佶、蘆千恵、蘆天津
「略」蘆春さんは初放送である、曲目の「蘆刈」は初代蘆船の作曲、「三津之綾」は先代蘆船の作曲である」 東京朝日に蘆春の写真掲載。		「略」今夜は特にAKの希望で昔風の鳴物がつく、なほ□の望月初子さんは家元望月扑清の娘さんで芸達者、二絃琴の蘆橋さんは初放送」	「略」蘆三津さんは日本橋馬喰町で書道の先生／蘆天津さんはそのお母さん、蘆佶(ロキチ)さんは蘆水さんの妹弟子で故蘆柳さん門下の双壁」	「略」池邊鶴」は此の新春御勅題をうたつたもので初放送」		「略」蘆千恵さんは蘆水さんの愛娘で初放送、蘆天津さんは蘆水さんのお弟子で浅草の師匠／蘆佶さんは蘆水さんの姉妹弟子で故蘆柳に教へを受け深川で師匠をしてゐる」

1937 (昭和12)					1936 (昭和11)
3/2 (火)	12/25 (金)	10/1 (木)	7/7 (火)	3/30 (月)	1/14 (火)
『読売新聞』朝刊一〇頁 「芦船社中の二絃琴」	『東京朝日新聞』朝刊一 四頁	『読売新聞』朝刊一〇頁 「笙の笛は初放送、初 秋」と、四季の今様は 難曲／二絃琴の新曲と古 曲」	『読売新聞』朝刊一〇頁	『読売新聞』朝刊一〇頁 「二絃琴／新曲と古曲 藤」	『読売新聞』朝刊一〇頁 「初春向きの二絃琴」
午後零時五分～零時 三〇分	午後零時五〇分～一 時一五分	午後零時五分～零時 三〇分	午後零時五分～零時 三五分、二絃琴と箏 曲	午後零時五分～零時 四〇分、演芸枠にて 二絃琴と軽音楽	午後零時五分～零時 四〇分
一「雛」 二「蘆分船」 三「窓の月」 いずれも歌詞有	一「四季の詠」 二「梅がしるべ」 いずれも歌詞有	一「笙の笛」作曲町田嘉章 二「初秋」 三「四季の今様」 いずれも歌詞有	一「浅妻」 二「新曲、深山の旅」 いずれも歌詞無	一「新ほと、ぎす」作曲町 田嘉章 二「藤」 いずれも歌詞有	一「鶴の舞」 二「新曲 春遊び」作詞蘆 天津、作曲蘆水 いずれも歌詞有
唄 芦春 琴 芦船、芦坤、芦勢、芦月 隆笛と三絃 町田嘉章	一、唄 蘆天津 琴 蘆水、蘆染、蘆佶 二、唄 蘆水 琴 蘆佶、蘆染、蘆天津	全曲、唄 蘆春 琴 蘆船、蘆福、蘆橋、蘆隆 三絃 蘆清 一と三、笛 喜三花、小鼓 初子 大鼓 太伊、太鼓 せい子	蘆水、蘆天津、蘆佶、蘆喜美 長美津、初子、太伊、せい子	一、唄 蘆春 琴 蘆船、蘆翠、蘆鷗 三絃 蘆清 二、唄 蘆春 琴 蘆船、蘆鷗、蘆悦、蘆翠 二、笛 喜三花、小鼓 初子 大鼓 太伊、太鼓 せい子	一、唄 蘆佶 琴 蘆水、蘆喜美、蘆昇、蘆天津 二、唄 蘆水 琴 蘆佶、蘆喜美、蘆天津 一と二、笛 長美津、小鼓 初子 大鼓 太伊、太鼓 せい子
「略」芦船さんは浅草馬道、 芦春さんは荏原、芦坤さんは 日暮里渡邊町、芦勢さんは柳 橋、芦月さんは代々木でそれ ぞれ師匠をしてゐる」	読売は歌詞および出演者情報 なし	「略」家元芦船さんは本名石 井久、芦春(三〇)さんは渡邊 春子、芦福(〇〇)さんは東福、 芦橋(二八)さんは関静子、芦 隆(〇〇)さんは松信隆子、芦 清(三〇)は金田えつさん」		「略」三絃の蘆清さんは初放 送」	

			1938 (昭和13)			
9/28 (水)	8/10 (水)	5/18 (水)	1/4 (火)	8/9 (月)	6/12 (土)	4/5 (月)
『読売新聞』朝刊六頁 「二絃琴」	『読売新聞』朝刊六頁 「二絃琴 正午の演奏」	『読売新聞』朝刊一〇頁 「お囃子入り二絃琴」	『読売新聞』朝刊一一頁 「二絃琴／古曲をうたふ ／四代目蘆船社中」	『読売新聞』朝刊一〇頁 「蘆翁襲名のお披露目放 送」	『読売新聞』朝刊一〇頁 「二絃琴 夏三題 新曲 と近代化した古曲二題」	『読売新聞』朝刊一〇頁 「二絃琴 菖蒲」とふ ぢ 芦水一党」
正午～零時三〇分	正午～零時三〇分	正午～零時三〇分	午後八時～八時二〇 分	午後零時一五分～零 時二五分	午後零時五分～零時 三〇分	午後零時五分～零時 三〇分
一「笙の笛」作詞初代蘆船、 作曲町田嘉章 二「松の調」 三「浅草八景」 いずれも歌詞有	一「四季の今様」 二「松の蔭」 三「砧」 いずれも歌詞有	一「東の榮」 二「短夜」 三「岸の藤波」 いずれも歌詞有	一「梅がしるべ」 二「七草」 いずれも歌詞有	一「敷島」作曲蘆水(読売 には曲名歌詞とも不掲載) 二「新曲 夏の夕」作詞蘆 水、作曲蘆翁 歌詞有	一「家形船」作詞林柳波、 作曲町田嘉章 二「夏の恵」 三「七夕」 いずれも歌詞有	一「菖蒲」 二「藤」 いずれも歌詞有
全曲、唄 蘆春 琴 蘆船、蘆月、蘆翠 一と三、三絃 町田嘉章 二、隆笛 町田嘉章	全曲、唄 蘆春 琴 蘆船、蘆月、蘆翠 一と三、三絃 町田嘉章 二、隆笛 町田嘉章	全曲、唄 蘆翁 琴 蘆船、蘆染、蘆水 一と三、三絃 喜三花 小鼓 初子、ワキ鼓 太美濱 大鼓 太伊、太鼓 せい子	全曲、唄 蘆春 一、琴 蘆船、蘆隆、蘆勢、蘆月 二、琴 蘆船、蘆孫、蘆隆、蘆勢 全曲、笛 喜三花、小鼓 初子 大鼓 望月太賀、太鼓 せい子	全曲、唄 蘆春 唄 蘆翁 琴 蘆船、蘆喜美、蘆水 笛 長美津、小鼓 初子 大鼓 太伊、太鼓 せい子	全曲、唄 蘆春 一、琴 蘆船、蘆翠、蘆秀、蘆浪 二、琴 蘆船、蘆秀、蘆翠、蘆浪 三、琴 蘆船、蘆浪、蘆秀、蘆翠 一と三、三絃 町田嘉章	唄 蘆水 琴 蘆船、蘆千恵、蘆天津 笛 喜三花、小鼓 初子 大鼓 太伊、太鼓 せい子
出演者情報は東京朝日九頁に よる。			蘆翁は前名蘆水。昨春蘆水を 蘆天津に譲った。	蘆水改め蘆翁、蘆天津改め二 代蘆水となった。「敷島」の 詞は本居宣長の歌。「敷島」 情報は東京朝日一六頁による。	東京朝日七頁に町田と蘆浪の 写真掲載。「家形船」の作詞 作曲者情報は東京朝日による。	東京朝日一六頁に蘆水、蘆翁 の写真掲載。

	1940 (昭和15)			1939 (昭和14)
	6/5 (水)	1/22 (月)	11/6 (月)	5/30 (火)
	『読売新聞』朝刊五頁	『読売新聞』朝刊五頁	『読売新聞』朝刊一〇頁 「枕草子を唄ふ二絃琴」	『読売新聞』朝刊六頁 「二絃琴 新曲と古曲」
	午後零時五分～零時 三〇分	午後零時五分～零時 三〇分	午後零時五分～零時 三〇分	午後零時五分～零時 三〇分
	一「蘆分船」 二「夕風の曲」 三「郭公」 いずれも歌詞無	一「初音」 二「四季の詠」 いずれも歌詞無	一「常盤」作曲四代蘆船 二「風は 枕草子より」作 曲町田嘉章 いずれも歌詞無	一「岩戸の舞」 二「鶴」作詞中村葉月、作 曲町田嘉章 三「岸の藤波」 いずれも歌詞有
	唄 蘆春 琴 蘆船、蘆葉、蘆秀、蘆翠 笛 三枝子、小鼓 初子、太美濱 大鼓 太伊、太鼓 せい子	唄 蘆翁 琴 蘆倍、蘆喜美、蘆千恵、蘆染 小鼓 初子、太美濱 大鼓 太伊、太鼓 せい子	一、唄 蘆勢 琴 蘆船、蘆橋、蘆蝶 三絃 町田嘉章 二、唄 蘆春 琴 蘆船、蘆橋、蘆蝶、蘆勢 隆笛 町田嘉章	唄 蘆春 琴 蘆船、蘆水、蘆州、蘆勢 笛 三枝子、小鼓 初子、太美濱 大鼓 太伊、太鼓 せい子
	蘆船の顔写真掲載			「鶴」は昭和十年の勅題 「池邊の鶴」に因んで新潟県 松崎で新聞を経営してゐる詩 人中村葉月さんが作詞(略)

四 おわりに

東流のラジオ出演については未だ調査不足であり、実際の出演回数

は更に多いと目される。とはいえ、多くの名取りの名や師弟関係が新たに判明し、蘆江改め四代蘆船襲名の経緯や、蘆水改め蘆翁の襲名という事実も判明した。蘆瑟改め三代蘆船が蘆江派(蘆船派)の旗頭として、しばしば話題にされていたことも確認できた。

演奏された曲目のほとんどは初代蘆船編の唱歌集に収録(歌詞掲載)のものだが、すでに節(曲)が失われ、復元曲として演奏されたものもあった。町田嘉章も新曲や復元曲を提供しているが、町田はなぜか蘆江派のみ楽曲提供したようである。蘆水派は自ら作詞作曲を手がける場合があり、町田が蘆江派に肩入れすることで釣り合いが取れたのかもしれない。町田が三味線や隆笛で伴奏したのも蘆江派の出演時ばかりである。鳴物との合奏は、蘆江派、蘆水派いずれにも限定しなかったようで、そのことは東流にとって大きな助けになったと考えられる。

付記 八雲琴と東流二絃琴の関わりについて

東流二絃琴の成立事情については不明点が多い。今回いくつか判明したことを、考え得ることを、ここに記す。

まず、中条信礼について。『諸芸人名録』(一八七五)にて藤舎芦船(蘆船)の次に名のある豊芦館(豊蘆館)は、もと幕府高家、幕末に国学者として知られる中条(中條)信礼と思われる。『八雲琴譜』に唄の作者の一人として「中条信禮」の名があり、信礼の号である神随舎の名も見える。信礼は鈴木(穂積)重胤らと共に、江戸在住八雲琴関係者の中核的人物ではなかったか。

『八雲琴譜』には江戸の「蘆舎主」による「盡ぬ別路」という唄があり、中山琴主作の「忘がた身」と応答歌になっていると思われるのだが、この蘆舎主は中条信礼の周辺人物と見なし得る。同書の序文の

一つは「あし廼屋の主人」によるもので、あし廼屋の主人が即ち蘆舎主であり中条信礼に近い人物であれば、東流の萌芽は既に『八雲琴譜』の中にあると言えるだろう。

次に、本多利實について。『諸芸人名録』に蘆船、豊蘆館に次いで名を記されたのが藤舎芦集(蘆集)、居所は巢鴨庚申塚とある。『本多利實伝』によると、この蘆集が利實であるという。利實は初代蘆船の没後、二代蘆船となるが、音楽関係文献にはその事績がほとんど見当たらず、本多流弓術の家元として名を成した人物である。利實が蘆集であるなら、彼は初代の縁戚(蘆船の息子の妻の兄)というだけでなく、二絃琴の師匠として初代蘆船を大いに助けたことだろう。実際、利實の日記には二絃琴をめぐる種々の活動記録が残されているようである。

さらに、『本多利實伝』で注目されるのは、利實と大岸元琴との関係が、東流成立以後に継続されている点である。初代蘆船は八雲琴の家元から破門されたこと、しばしば伝説的に語られてきたが、東流は少なくとも八雲大岸流とは穏便な関係を保っていたのではないか。なお、大岸元琴は八雲大岸流の家元であると同時に、鎖鎌の大岸流の関係者でもあったらしい。利實と元琴は、武芸を極めるために音楽を学んだ者として共鳴するところがあったのではなかろうか。

東流は長らく、素人の女性芸能として命脈をつないできた。だが、その源流に立ち返ってみると、幕末維新期の国学者や士族たち、決して少なくない数の男性が、詞を作り曲を作り、歌の心を講じ、音律の道を説き、歌い方、弾き方を伝授して、東流二絃琴の普及に努めたのではないだろうか。そうした東流初期の組織体の様相が明らかになれ

ば、東流二絃琴の思想性の解明にもつながることだろう。

注

- (1) 重松恵美「東流二絃琴に関する資料目録(明治篇)」および、同資料目録(大正篇)。(『女性歴史文化研究所紀要』第二六号、第二七号、京都橘大学女性歴史文化研究所、二〇一八年三月、二〇一九年三月)
- (2) 町田佳聲「遊びの上に成立した東流二絃琴百年の浮沈」(『東流二絃琴』キングレコード、一九七五年)
- (3) 田辺尚雄、平野健次「一絃琴【日本】歴史」(『日本音楽大事典』平凡社、一九八九年)
- (4) 平野健次「二絃琴【八雲琴】成立と名称」(『日本音楽大事典』)
- (5) 『現代音楽大観』は、前稿「資料目録(大正篇)」にて紹介。
- (6) 山本震琴は「八雲琴の系譜とその内容」にて次のように述べる。「東流二絃琴は、八雲琴の変形として、当道では異端者として認めない。」「琴主の弟の大岸元琴は(略)これは大岸流と自称して別派を名乗った人で、「勝色」と云ふ曲を作つてゐる。出雲舟歌系に属する流れで正統ではない。」(山本震琴編著『八雲琴 楽譜と詳解』上巻、雄山閣出版、一九七七年)
- (7) 『新聞集成』収録の『報知新聞』記事については、山本四郎『評伝原敬』上巻、東京創元社、一九九七年に教示を得た。
- (8) 一九二九年十月二十二日『読売新聞』朝刊一〇頁によると、蘆水は五九二票を獲得。同年十月二十六日『読売新聞』朝刊一〇頁には、蘆瑟五二六五票、蘆水三七一一票。十一月三日および六日には、蘆瑟、蘆水のほか、蘆富志、蘆侘、蘆江、蘆天津の得票も報じられている。
- (9) 『東流二絃琴唱歌集』(一八八五)は、前々稿「資料目録(明治篇)」にて紹介。
- (10) 蘆江の甥姪は俳優の沢村国太郎、沢村貞子、加東大介。蘆江については貞子と、貞子の姉(民俗学者の矢島せい子)の著作が参考になる。
- (11) 『諸芸人名録』は「資料目録(明治篇)」にて紹介。
- (12) 中山琴主『八雲琴譜』刊年不明。『神傳八雲琴譜』とも呼ばれ、安政

六年(一八五九)頃成立と推測される。平野健次・久保田敏子翻刻『翻刻複製 八雲琴譜』上下巻、アポック社、一九七九年を参照した。

(13) 鈴木重胤、幕末の国学者。『八雲琴譜』に穂積重胤の名で跋文を寄せ、唄の作者として版権本の号を用いている。

(14) 小林暉昌著、本多利永監修『朝風松風 本多利實伝』弓道本多流史上巻、東京大学弓術部・赤門弓友会、二〇一七年

(15) 大岸元琴は本名、越智正常。八雲琴の初代家元・中山琴主の実弟。『利實伝』九〇頁によると「利實は昔船に二絃琴を習っているが芦船の師匠でもある大岸元琴にも、明治三年(略)入門もしている。十三年九月二十五日の記述でも「(略)大岸元琴八雲会に出席す」といった大岸との交流も記録されている。」という。

(16) 窪田英樹『八雲琴の調べ 神話とその心』(東方出版、一九八六年)によると、大岸家には「武器の鎖鎌が残されて」おり、「大鎌の柄に「元祖 八雲 大岸流」と彫りつけてある」という。また、元琴は「八雲琴譜」の跋文に、「武と律との二道の大業の奇妙に至らん事を願はん」として出雲大社に参籠し、「天の八重鎌の大御業の秘事の御伝」を授かり、「八雲大岸流と御改させ給はりける」と記している。